高齢者の豊かな生活のために　　２０２０年７月１日発行

手 賀 沼 通 信（第２６８号）

新田良昭

９２歳の家田和利様から投稿をいただきました。今まで家田様からは５編、奥様から１篇のご投稿をいただいています。

今回はご自身の人生を簡単にまとめられておられます。お手紙に「ヨミウリ東京会への私の投稿です。これが『最後』となるかもしれません。よろしくお願いします」と書かれていました。

都内へもたびたび出かけられるほど、私よりずっとお元気なのですが、お歳を考えられてのメッセージと受け取らせていただいております。

これが「最後」でなく、今後ともご投稿をお願いするつもりです。

特別寄稿

３回の初恋　　家田和利　９２歳

私は昭和３年５月２０日、大森（当時は東京府荏原郡入新井町字新井宿）に生まれた。自宅から村社春日神社の横を通って更に国鉄の線路（大森・蒲田間）の方へ、自宅から子供の足で約２０分の東京市立入新井第二尋常小学校に昭和１０年４月入学、１年３組でした。姉２人弟１人妹２人の６人の３番目の長男だが立場を考え、チャップリンファンの職人が去って、幼い頃から家業のクリーニング業の主として洗い場を手伝った。

当時は幼稚園（めぐみ幼稚園が池上にあってロバの引く車で送り迎え）は稀で私も行かず、粗削りな野蛮の儘の入学。当時は大きな方で毎朝、校庭に全校生徒が縦２列に並ぶ朝礼では、後ろの方で、隣の松田君の半ズボンの脚に水疱瘡があって、それが気になって、しゃがんで潰して居た。彼が「嫌だ」と言えば止めただろうが、何も言わないので、翌朝も翌々朝も、毎朝やって居ました。処が列の先頭の前で生徒と向かい合った担任の酒泉先生（ベテランの女性教師）には丸見えで、終わって毎朝その儘、独り校庭に立たされた。

許されて昇降口で、偶々裁縫教室へ移動で皆と一緒に階段を降りて来た６年生の長姉とパッタリ。「又立たされたの、恥ずかしいじゃない！」と叱られた。教室に戻ると直ぐ授業について行き、挙手して答え、算術・国語が得意でした。松田君の家では私の噂が出ると見えお邪魔すると、母親から仲良しと謝辞があった。水疱瘡が治って、潰すのを止めたのは、１学期の終わりの方でした。

秋の学芸会ではミュージカル「舌切り雀」を１年生がやり、主役のお爺さん役は大抜擢で私が務め、お婆さん役は別の組の林さん、雀役は同じく岩井さんが演じたが、２人共可愛らしい女子。私は歌唱力があった訳ではないが、女性の井上先生が舞台裏横で助けて呉れました。♪「おお、おお今日も良い天気、どれどれお山へ芝刈りに。それでは雀よ、大人しく私の帰りを待っといで」♪「爺さま、お山へお出かけか、幸いお糊も煮えたから、私も川へ洗濯に」処が、糊が減って居るので、雀が食べたと叱って舌を切りました。雀は泣き乍ら、山へ逃げて行きました。お爺さんは山から戻って事情を聞いて、雀のお宿へ訪ねて行き、♪「愛しいとしと爺さんは杖を頼りにテクテクとお山の奥のその奥の雀のお宿に参ります」と言う様な展開でした。

雀役の岩井さんは２年上の双子の兄が居てガードが固く親しく出来ません。お婆さん役、林さんは大井青物横丁の府立第八高女入学、卒業、私は大森を離れ疎遠になりましたが、美人に育ちその結婚され、比較的早死にだったそうです。学友のクレージー・キャッツの犬塚弘君らとゴルフし林に打ち込んだら「林さんが呼んで居る」とファンが多かった。その後、世田谷から参加して同期会も主宰し、岩井さんとは同期会でお会いしました。同期会も参加者が減り、１５年前に終了した。

１年生の正月には級友沼本さんと２人で担任の酒泉先生宅を訪問し、飲み食いには口をパクパクせず、口を閉じて戴くものと教わって、私も粗暴さから、上品なエレガントさが身に付き始めました。学年末の終業式に私は５クラスの１年生総代となり「修了証書」を戴き、長姉の名誉回復が出来ただろうと思った。

その儘、２年３組になるとギリシャ神話に出て来そうな色白で理知的な女子、山本圭子さんが台頭してクラスでもトップを争うようになった。私も彼女を意識し特別扱いに、彼女も私を意識し始めました。相思相愛にはちょい早いが、相思は確かで８歳の「第一の初恋」です。彼女の家にも何回かお邪魔し歓迎された。処が、父親の転勤で２年生の２月に青森市へ移転。彼女の家でのお別れ会には親しい者が５，６名集まり、男子は私のみでした。

暫く文通したが、月日が経つ中に途切れた。成人してサカナヤの商社マン２年目、２２歳となり輸出用三陸の乾鮑（アワビ）に加え、現在鮪で有名な下北半島大間の突きんぼの鮑も台湾向けに必要で、現地に出張し商談を纏め、青森市隣の浅虫温泉に宿泊。翌日、帰京前に山本さんに会いたい思いに駆られ、色々迷い悩みましたが、今更却ってご迷惑かと遂に諦めた。温泉では脱衣所は別だが広い浴槽は男女混浴で男性は私独りで、女性ばかりで出るに出られず困った思い出があった。

昭和１６年、府立一商に入学したのは東商大予科（現一橋大）を目指しての事で、４年、５年生一緒で定員１２０名を受験、１９名合格の中に入ったが、戦争が激しくなり学友も陸海軍に志願して出征して行く中で、私がおめおめと勉強して居る訳には行かない。長男の私と母親との妥協点は現役でない事だったので、戦時には商船学校と２校が入学と同時に陸軍船舶予備生徒に任官する越中島の農林省水産講習所（新制東京水産大学、東商船大と合併し現東京海洋大学海洋科学部）製造科５０名に３６倍の難関を突破して入学し、折角の東商大は捨てた。１年生で午前は実験を交え理科、英語の経済原論、午後は軍事訓練、漕艇訓練。勤労動員中、米グラマン艦載機に機銃掃射も受けましたが、水産最後の１ヶ月は米軍本土上陸を想定し爆薬抱えて匍匐前進、敵戦車に体当たり肉弾特攻する訓練に明け暮れた。８月１５日の終戦で命拾いし、学友も本土決戦で全員内地に待機し、戦死者は居ませんでした。併し、戦後の昭和２０年代には栄養失調の結核になり、戦争で助かった命を失った者が多かった。

水産３年生、１９歳の時、校舎は進駐軍に接収され、神奈川県久里浜の旧海軍通信学校（本校舎は米軍）のバラック宿舎に学校のボートで自力移転したが器材も破損したので、４年生２０歳は所外実習となり、級友と３人で山好きの私が決めた実習先の長野缶詰興業(株)（ジャム製造で、余り勉強にはならないが）の先輩の製造課長を頼って昭和２３年１１月～翌年２月、篠ノ井工場宿舎に移動、宿泊。課長より協力するように言われた女子事務員は良く資料集めをし、卒論の手助けをして呉れた。特に風邪を引いて寝込んだ際には、親身も及ばぬ看病をして呉れ、有難いと思った。彼女は上田の鉄道官舎で家族と住み、終業後いつも炬燵に入り、帰りの汽車の時間待ちしました。

偶々２人切りの時に、彼女は「ずーっと、こうして居たい！」と言って下を向きました。私も「うん、そうだね」と答え、初めて手に触れました。他の級友２人も似たような感情だったと思う。これが２０歳私の「第二の初恋」です。

卒業後も、彼女の上田の官舎を訪ね、両親、弟妹とも親しくなり、信頼関係は十分出来ました。その後、彼女は東京本社に転勤となり、清いお付き合いを続けた。ある時、新橋駅１８時デートの約束が、突然の取引先接待で２時間遅れて新橋駅に行ったが、彼女は私を信頼してじっと待って居て呉れました。

父の転勤で松本の鉄道官舎に移転した事もあって、会社を辞めて帰郷、保育園で保育士として熱心に働き、子供等と仲良しになって居た。一方、私は終戦で仕事を失った父に代わって一家を支え、弟妹を学校に通わせる事で精一杯、気にはして居ても自分の事は後回しにせざるを得ない環境に居た。

彼女は当時の級友に「家田は未だ独りで居る」と聞き、アプローチして来た。６年近く待たせた訳で、もうこれ以上は無理と思い、埼玉県熊谷市隣の吹上町に先輩の持家の貸間を用意。準備不足の儘、母親と浅間温泉に泊まり最後の親孝行、翌朝、彼女の実家に出向き杯を交わしました。母親と別れ新鹿沢温泉等２晩新婚旅行らしき事をして吹上に落ち着いた。時に昭和２９年８月２日で、私が２６歳、新婦、志づは８ヶ月姉さん女房。彼女は信頼と愛情たっぷりな性格で、翌３０年１１月に長男(現在６１歳、政策研究大学院大学役員教授、東大名誉教授)が生まれた。その後、私の扁桃腺切除入院、肺結核右上葉切除入院や術後養生で松本の実家に家族共々お世話になり、現天皇・美智子妃のご成婚をＴＶで見て帰京。両親を看送って改造した世田谷の自宅に落ち着き、2ヶ月後復職。多

少の蓄えも無くし、会社から借金して凌ぐ。体調がやっと回復して次男、力は長男と４年違い昭和３５年１月誕生(現在５７歳、科研製薬（㈱）取締役研究開発本部長)した。

昭和４６年２月米加州大地震直後のＬＡに転勤し高校入学した長男が残留希望で、夏休みに志づと小学５年の次男と共に３人で渡米、２週間ＬＡ滞在、距離感と外国住まいを体験。これが兄弟のその後の仕事のグローバル化の基になった。(長男には帰国後、松本から義母が上京同居し、お世話戴いた)

ＬＡ３年間滞在中に胃痛を訴える志づに米人医師は「消化不良」の診断、折から私のＮＹ転勤があり次男も中学１年（長男は東大入学）となるので、私は単身赴任し家族を帰国させ、阿佐ヶ谷の河北総合病院（私の右肺上葉手術した東医歯大教授が院長）で診断を受けるように強く言い、帰国させた。

１年経って、今度はＬＮ転勤の話は４年別居中の長男と合流する為に、辞退し帰国した処、志づは特に痛まないので診断は受けてないと。お互いに当時の癌に対する知識の乏しさで、早速病院で受けた診断が「癌だが小康状態」と。

会社は数年前から、日本・シンガポール・インドネシア（出資金は日本が支弁）3 者合弁で北スマトラで責任者工場長、経理担当は当社々員、経験豊富な台湾人を数名雇いスマトラの奥地でパイナップルの自家栽培・缶詰製造事業を始めたが、今一本腰が入って居らず赤字状態。志づが辞めてと言えば止めたが「でも、行きたいんでしょ」と言われ、未だ彼女は大丈夫と思って、前年新築の柏市の新居から昭和５２年１月シンガポールに着任。現地東銀支店に詳しく説明、資金援助を求め、販路の米・中東の更なる開拓を約してバックアップに専念、スマトラ、メダンから奥地トバ湖畔ペマタン･シアンタル現地の生産監督、販路の中東に出張、更なる開発に努め、１年後黒字転換させた。

その間、志づは２回シンガポールを訪れ、１回目はまあまあで各地を訪問出来たが、２回目は次男と共に来て、彼は大学受験準備で１０日間で帰国したが、残った志づは殆ど寝たきりで、シンガポール大学病院で余命３ヶ月と言われた。昭和５３年２月会社に特別休暇許可を戴き私と志づで帰国。彼女は航空機のタラップも自力で昇降出来ず、機内は寝たきり。羽田空港から河北総合病院に直接入院。癌はもう手の着けようない位全身に転移して居て、私も柏―銀座―阿佐ヶ谷―柏と定期券を購入、終業後病院に行き、志づを看病。胃のゲップをする為、私の首に掴まり上半身を起こしたが、その力の強さに「生きたい！」意欲を痛感させられた。

ゴールデン・ウイークが始まったが、休みにも関わらず、院長、担当医が検診して呉れたが、愈々時と思い息子達、双方の弟姉妹を呼び見守る中、丁度３ヶ月昭和５３年５月１日、遂に臨終。享年５０歳８ヶ月。足立区の菩提寺、両親の墓に、他に２人の縁のある信州善光寺にも墓を設け弔らったが、私の軽率さのせいで志づを死に追いやり、可哀そうで可哀そうで残念で残念で、後悔しきりだった。

それから５ヶ月、級友の清水君より「良い人が見つかったから見合いに来い」と電話。未だそんな気は更々ないが、心配して呉れる友情が有難く、柏から車で世田谷のお宅に行き、本人が来る前に読んだ釣書に色々ある中で「趣味：食べる事」とあって、サカナヤの私には嬉しい言葉。「今晩メシ食ったらチャンスあるよ」と言い残し車に乗せ色々廻って結局、渋谷駅前のロゴスキーで晩飯を食べた。少食の彼女は「こんなに食べられない」と、初対面で残しても良いのに、私の皿に取り分けた。「彼女は家族が欲しいんだな」と察し、好感を持った。

小児麻痺から下半身不自由な琴の師匠の長姉の面倒見に、彼女は鳥海山西北麓、奥の細道で著名な秋田県象潟から、酒田の鐙屋さんに下宿、酒田女子高校を出て中野、世田谷と姉と同居、お世話し、伊東服飾研究所卒のドレスメイキングのプロ、清水夫人らを指導し昵懇の間柄。私は再婚を決意、彼女の同意を得、息子達も養子縁組賛成（「今夜メシ要らない」と２人で出て行ったが、後で聞くと彼女とロゴスキーで食事して自分ら自身で納得)、彼女の長兄の了承、結納し、彼女を連れ松本の亡妻の両親に事前ご挨拶（義母は孫の為に賛成)、善光寺の墓に報告し、昭和５４年４月、亡妻、志づの一周忌法要を善光寺で営み、1ヶ月後の私の誕生日５月２０日にホテル・オークラで挙式したのが今の妻、欣子。式では長男は理科系らしく「前の橋を継ぐのでなく、ご自分の新しい橋を架けて下さい」と挨拶し、一浪の次男は間に合って花束贈呈して呉れた。欣子を入籍、養子縁組も成立した。

何事にも真面目に真剣で研究熱心な欣子は料理

上手、私達を喜ばして呉れた。しょぼたれて居た私を奮い立たせ、以前にも増してやる気を起こさせて呉れたと感謝する。再婚８ヶ月、インドネシアのパイナップル合弁事業のパートナー造反事件処理の為、会社に長期出張を命ぜられ、私は又、スマトラに出掛けた。工場では警察官のバイトの警備員にピストルを押し付けられ排除されて了った。在インドネシア日本大使館とも連携し方策を探したが、日本の関係先への配慮もあって撤退を決定。損失処理は大変だった。東京本社缶詰部の監督責任だが、直接折衝の私の責任も考慮、役員にならず。それを配慮して、フリーになって６年間社外監査役をやった。

一浪の次男と欣子は血の繋がらない母子だが、受験戦争を共に戦った同志としてとても仲が良く、彼の家庭は流山市と近く、気軽に来宅して呉れる。但し子はなく、長男の孫娘夫婦と曾孫２人の４人家族は、北九州市に転勤、移転。

第二の仕事として定年退職１年後、５９歳、マルチャン･ラーメンの東洋水産故森会長の要請で、小さな野菜商社に入社、私は鮪等輸入魚介類を取扱い。輸入製品の製造指導・監督にカナダバンクーバーに欣子を同伴、5ヶ月長期出張。折を見てナイヤガラ滝やＮＹのワールドトレイドセンター（後にテロ喪失）の旧会社やＬＡ訪問し、亡妻同様海外にも慣れさせた。その後インドネシアにも連れて行ったが、大変な所ねの論評だった。

お互いがお互いを必要とする同志として、愛情も沸いて来た。「第三の初恋」とは言わないが、もう亡妻の６年待たせて２４年の結婚生活に対し、３８年を超えた。私より２歳４ヶ月若い欣子だが、残るのが辛い私の経験から、彼女を先に看送ってから、死にたいと思う。色々あったが、まあ良い人生にしたと思った。

丸顔の甲府生まれ甲州美人(山梨県は美人が少ない県で少々甘いが)の亡妻と対照的に面長な顔立ちの秋田美人の欣子は柏市に住んで、すっかり色黒の房州女になった。当時、志づの写真は家中に貼って居たが、再婚となり長男の忠告で外した。沢山あった筈で捨てる訳もないが、今回探しても見当たらず。でも色々面倒見た義弟の結婚で頼まれ仲人の写真のみ出て来た。

不自由な長姉から欣子を取り上げ、姉は象潟へお帰りになった。現地社協の絶大な面倒見で何とか生活し、私も象潟で何回かお会いしたが、気品と気丈さを兼ね備えた方だったが、この４月１日に９９歳で亡くなられた。欣子は妹と２人で象潟へ、現地親族と葬儀等行い帰宅した。

私も６人姉弟妹が現在末妹と２人、欣子も５人姉兄妹が末妹と２人（２人は昭和１０年生まれの同年、何れもあけぼの会々員で、海外旅行・国内旅行にも同行。昨年９月、北海道新幹線で函館・札幌等も同行した）

戦前戦中派の世代は私に限らず、皆潔癖で倫理観が強く、女姉妹の中で育った女好きな私だが、女子挺身隊の付文「交際して」を「そんな時ではない」と断った事、同時期、挺身隊の女性と外注先へ共に、戦後は姉弟として４年交際、弟の会社友人で山仲間の女性と兄妹の交際。日魯漁業㈱貿易部長秘書の求婚申し出でを断り、女性が断然多い２７年目になる高齢者生涯学習のあけぼの会等々、女性関係は多々あったが、今日迄、初婚、再婚等キチンと清く通して居る。

主宰して居るグループ活動も７５年の府立一商クラス会「一土会」５０名が現在１５名、２７年になるあけぼの会４２名が２１名（柏が精々で、東京は無理が増えた)、３年になる隣近所親睦のふじさん会８名やこの「東京会」でも頑張って居る。家族の為に健康寿命を延ばすべく、努めて居るが卒寿(９０歳)となり、最近杖を付いても歩行が辛くなった。何とか居られるのも精々後１、２年か、２０２０年東京五輪は無理と思って居る。戦後生まれの一部が中国人の様に自分本位で他人の人生を顧みない方が多いのは理解がつかない。(平成２９年７月２５日記)

家田さんの「あけぼの会」

家田様は文中にもありますが、柏の高齢者の会「あけぼの会」の会長をされておられます。

「あけぼの会」は平成３年に家田様が結成されました。毎年、新年総会、日帰りバスハイク、１泊バス旅行、映画会、講演会、観劇会、忘年会など年１０回ほどイベントがありました。

私が入会したのは平成１３年６月、それ以後毎年お世話になりました。多くのお友達もできました。

今は会長はじめ会員が高齢化し、２０１９年１月の「ソプラノライブショー」を最後に休会となっています。